

八幡市民会館リボーン委員会からの提案について

平成 29 年 4 月 13 日に旧八幡市民会館の建物の利活用策について、八幡市民会館リボーン委員会から提案があったので下記のとおり報告します。

記

1 提案の内容

(1) 名称

「北九州 こども・まち ミュージアムーHAWADOー」

(2) 活用案

①「北九州こどもはつらつ元気館」

・ホール部分に大空間を活かしたネット遊具や職業体験ブースなどを設置し、屋内のプレイホールとして活用。

②「北九州わくわくミュージアム（北九州都市建築博物館）」

・美術展示室部分を北九州の都市のあゆみ及び土木建築遺産等についての展示スペースとして活用。

③「北九州こどものときどきまちづくり（ミニきたきゅう）」

・テラススペースを屋外の休憩場所やワークショップとして活用。

(3) 運営組織

○NPO 法人又は財団法人とし、平成 29 年度末をめどに設立を目指す。

○日常の運営実務は少数の管理者とシニア世代を核としたボランティアスタッフの協力で行う。

(4) 収支計画

①イニシャルコスト

民間負担分：施設改修、整備に要する費用（2 億円程度を想定）

市 負 担 分：耐震、バリアフリーに関する改修及び一部解体費用

②ランニングコスト

こどもはつらつ元気館の入場料収入で賄う予定

（来場者：18 万人/年、料金：300 円/人、収入：約 5,400 万円/年）

(5) 段階的整備について

○「北九州こどもはつらつ元気館」のプレイホールのネット遊具など大型遊具の整備からはじめ、キャリア体験スペースブースなどは、その後企業協力を募りながら徐々に進める。

2 提案を受けての市の対応

○事業性や持続可能性などの視点を踏まえ提案を精査し、1～2 ヶ月を目途に市としての方向性を示す予定。

平成 29 年 4 月 13 日

北九州市長 北 橋 健 治 様

八幡市民会館リボーン委員会
委員長 山 本 雄 造

旧八幡市民会館再生に関するご提案とお願い

八幡市民会館リボーン委員会ではかねてより同館の再生のために、その活用策を求めて活動してまいりましたが、このたび再生・整備計画の基本構想がまとまりましたので、提案させていただきます。

本再生プランは、会館の外観は可能な限り現状を維持し、地域の歴史を体現する景観資源としての価値を継承します。また同時に、同館は本市にゆかりの深い近代建築の巨匠である村野藤吾の傑作として高い評価を受けており、その再生存続が、市民のシビックプライドの醸成に寄与する価値ある建築遺産としての位置づけがなされています。詳しくは別紙「提案書」並びに「基本構想書」をご覧ください。

私たちリボーン委員会は、会館再生は民間活力の活用を前提として行うとの基本認識のもと、今後は本「基本構想」を実現するために、「基本計画」の策定を行うとともに、運営主体の設立、寄付金募集の活動、詳細な収支計画の策定、地域の支援組織の構築等の諸活動を推進してまいります。

行政におかれましても、本事業の歴史的意義、地域資源活用の意義、次世代育成とにぎわいづくりの新たな拠点整備の意義、それらすべてがシビックプライドの醸成に寄与するという総合的意義をご理解いただき、本事業成功に資する可能な限りのご支援、ご協力をお願いいたします。

提案書

平成 29 年 4 月 13 日
八幡市民会館リボーン委員会

旧八幡市民会館の再生に関する提案

「北九州 こども・まち ミュージアムーHAWADOー」

整備構想

－ 次世代育成とシビックプライド醸成のための地域資源の活用拠点として －

1 はじめに

1901 年の官営八幡製鉄所の操業に伴い近代国家発展の礎となった八幡は、我が国を支える産業都市として、国内外から集った多くの人々とともに街が形づくられていきました。一方、そのような都市の性格上、甚大な戦災、深刻な公害、グローバルな規模での産業構造の転換など、これまで数多くの難局に面してきましたが、その都度、市民、企業、行政の力を結集し、対処・克服してきました。

これら地域の歩んだ歴史・記憶を物語る豊かなパブリックスペースが、いまなお八幡駅前エリアを中心に広がっています。なかでも 1958 年（昭和 33 年）に竣工した八幡市民会館は、2015 年（平成 27 年）度末をもってホールとしての用途は廃止されましたが、地域の歴史を体現する象徴として、長く次世代へと引き継ぐべきかけがえのない建築資産です。また、近代建築の巨匠である村野藤吾が手掛けた数少ない公共建築でもあり、建築的価値を含め、その行く末が全国的な注目と関心を呼んでいます。

しかしながら、近年の縮退していく地域社会・経済情勢のもとでは、建築物にどれだけ価値や魅力があろうとも、単なる保存・継承の視点だけでは限界があります。市民と行政の知恵と力を結集し、新たな時代のもとで手法にとらわれず、これからの本地域の魅力づくりに貢献するとともに、他都市にはない独創的な活用を実現することで、八幡市民会館を地域浮揚のエンジンとして再生していくことこそ、今を生きる私たちの責務です。

そのような中、八幡市民会館リボーン委員会は、地域の民間企業等の皆様の力を結集することによる八幡市民会館の保存・活用について、つぎのとおり再生プランを提案します。

2 再生プラン

八幡市民会館の内部を改修・用途転用し、次世代育成の地域資源の活用拠点へ

外観は可能な限り現状を維持することで、地域の歴史を体現する景観資源としての価値を継承していきます。内部については、大胆なコンバージョン（用途転用）を行い、北九州市の未来の持続可能な発

展を目指すという視点で再生、そのための次世代育成とシビックプライドの醸成のための地域資源の活用拠点として運用していきます。施設構成については、当該建築のホール、美術展示室、屋外テラスという3つの空間が有するポテンシャルをそれぞれ最大限に引き出し、「北九州こどもはつらつ元気館」、「北九州わくわくミュージアム（北九州都市建築博物館）」、「北九州こどものどきどきまちづくり（ミニきたきゅう）」の3つの機能が有機的に連携するものとします。そして施設名称については、「北九州こども・まち ミュージアム—HAWADO—」とします。略称 HAWADO（ハワード）は、3つの構成施設のキーワード「はつらつ／わくわく／どきどき」の頭文字をローマ字表記したものです。

また施設の運用にあたっては、隣接する本市の小児医療の拠点である新北九州市立八幡病院、同院内保育所、新八幡図書館をはじめ、近隣の大学や学校、企業、「子育てふれあいプラザ」、「こどもの館」など次世代育成を旗印に産学官が一体となった連携体制のもと、この立地・建築・空間でしか成しえない民間運営ならではの独創的な運営を行っていきます。

「北九州 こども・まち ミュージアム—HAWADO—」を構成する3施設

A 「北九州こどもはつらつ元気館」

ホールとしての機能が廃止された内部空間については、ホール特有の広大な空間をダイナミックに活用し、こどもの好奇心を引出し五感を刺激する大型遊具等を配置し、子育て世代を中心に市内外の幅広いエリアからの集客を想定する屋内プレイホールを中心とした空間へと改修します。また、地域の企業等の協力のもと、こどもたちが本地域の魅力的で特徴ある産業・企業への理解を深めていくことを目指し、職業体験ブースの整備なども行います。

B 「北九州わくわくミュージアム（北九州都市建築博物館）」

現在の美術展示室部分については、こどもたちや市民のシビックプライドの醸成等を趣旨に、世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業（官営八幡製鐵所関連施設）」をはじめとする北九州の都市のあゆみ及びいまに残る貴重な土木建築遺産等についての展示（情報発信）や付随する活動に特化した空間へと再構成します。

C 「北九州こどものどきどきまちづくり（ミニきたきゅう）」

震災復興のもと整備された八幡のまちの街路計画の象徴でもあるラウンドアバウトを見渡せる屋外テラススペースについては、こどもたちが楽しみながら自らが暮らす都市空間や未来の北九州についての思索を深めることを目的に、建築、ものづくり、まちづくりに関する大規模なワークショップやイベントを行うための創造的で実践的な活動拠点としての活用を行います。

*「ミニきたきゅう」については、別添「構想書」参照

3 本再生プランを提案する理由・意義

八幡市民会館を維持し活用していくことの意味は、まずもって北九州地域とも縁が深い村野藤吾が手掛けた近代建築の国民的財産を保存活用していくことにあります。市民会館としての用途廃止以降、本建築の存続を巡っては、地域内外で大きな関心と注目を集めています。事実、当委員会が実施した活用案募集コンペに対しては、日本全国からの提案をはじめ、九州・山口の10大学の学生など、地域内外から短期間に70件ものアイデアが集まるなど、八幡市民会館に対しては、若い世代を中心に全国的な高い関心があります。このような中、知恵と工夫を集め何らかの活用がなされ、本建築の保存・維持が行われれば、北九州市は地域の歴史や建築文化・都市文化に理解ある都市として社会的責任を果たすとともに、大きな名声（PR効果）を得ることもできます。

一方で、国勢調査ベースで全国の市町村で最も人口が減少する北九州市、特に、唯一の消滅可能性都市（2014年「日本創生会議」発表）に指定された行政区である八幡東区では、その根本原因である若年人口の減少を食い止め若年層の地域への定着を促進するための施策の推進が喫緊の課題となっています。あわせて人口減少が進展する社会環境の中では、北九州市の公共施設マネジメントの視点を踏まえ、施設の総量を抑制していくという視点も重要です。

このように、貴重な建築遺産であるとともに本地域の栄光のあゆみを体現する建築を維持していくこと（ハード）と、公金投入を可能な限り抑えつつ今後の本地域の浮揚に結びつく活用策（ソフト）とを両立させるべく、本提案では、これらに応えるものとして「次世代育成（こども）」を基本コンセプトに据えた再生プランとしています。

感受性が豊かなこどもたちは、自分たちの暮らすまちの歴史を学ぶとともに、魅力的な人々との交流や街なかの特徴ある空間での体験を重ねていくことで、我がまちへの帰属の意識を高めシビックプライドの醸成が図られます。また、こどもたちが楽しくのびのびと創造的に活動できる場に対しては、地域内外に関わらず大きなニーズがあります。これら学習とエンターテインメントをうまく融合させたコンテンツを提供するためには、民間の柔軟な企画運営手法が最適であるとともに、これからの新たな官民連携のあり方でもあると考えます。